

《評論連載》

児童

文学

補

完

計

画

①

— ノスタルジア

石井直人

0 はじめに

これから、ノスタルジア、暴力、速度という三つのテーマを考えることにしたい。それをとおして二〇〇〇年代以後の現在における児童文学の条件のようなものを再検討できればよいと思う。

まず、ノスタルジアから始めてみよう。ノスタルジア(nostalgia)とは「故郷をなつかしみ恋しがること」である。郷愁、懐旧の念でもある。ノスタルジーという表記の方が口当たり良いかもしれないが、ノストフォビア(nostophobia)という反対語のために語感を揃えておきたい。「どうしようもない、抗いがたい時間の流れ、社会の変化をいったん断絶として受け入れた上で、愛惜する」という定義に、抗いがたい空間の隔たりを付け加えたくらいがちょうどよいニュアンスだろう。

1 『STAND BY ME ドラえもん』

このテーマにこだわりをもったのは、『STAND BY ME ドラえもん』だった。ストーリーは、テレビのCMや宣伝番組で知っていた。電通によって「ドラ泣き」というキャッチフレーズが作られたらしいことも知っていた。が、DVDのケースを見たとき、ちょっと驚いた。ドラえもんの涙目の顔がどアップになっている。ここまで泣きを前面に出すのか、と思った。もっとも、主題歌が『言葉の庭』の秦基博、脚本・監督が『ALWAYS 三丁目の夕日』の山崎貴なのだから、号泣も当然かもしれない。そもそも、タイトルが『STAND BY ME ドラえもん』なのだから、映画『スタンド・バイ・ミー』とベン・E・キングの歌声が聞こえて来ても幻聴とはいえない。振り返れば、たしかに、初期のTVアニメ版「ドラえも